令和４年度　日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立平沢中学校　教諭　矢部　古都美

１　派遣期日　　令和４年６月 18 日（土）
２　派遣先　　東京学芸大学付属世田谷中学校
158-0081　東京都世田谷区深沢 4-3-1
https://www2.u-gakugei.ac.jp/~setachu/
３　研修内容
（１）視察校における研究への取り組み

研究主題：情報活用能力を育むモデル単元の開発
―資質・能力をベースとした教科横断による実践を通して―

（全体会）
本視察先は、大学の付属校であるため、大学と協力しながら研究を進めている。
「協働して問題を解決する力」「多様性を尊重する力」「自己を振り返り、自己を表現する力」「新しい社会を創造する力」の４つの力をもった次世代の子どもたちを育成することを目標としている。
現行の学習指導要領では、「言語能力」「情報活用能力」「問題発見・解決能力」が学習の基盤となる資質・能力として例示されている。これらについては、「各教科の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図る」ということからも、教科等の学びの上位概念として位置づけられるものである。本研究はとりわけ「情報活用能力」に焦点を当てたものである。

（２）授業公開

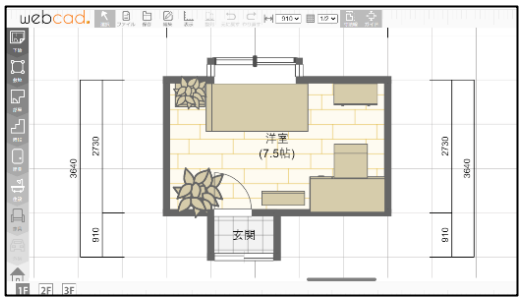
家庭分野研究主題
情報活用能力を育成し、実生活に生かす指導の工夫

第２学年　技術・家庭科（家庭分野）　　授業テーマ・よりよい住まい方を考える

住領域を指導する上での課題として、「身近な生活の場として住まいを取り上げる際に子どもの社会階層差が出てしまう」、「住領域は、学習した内容を子ども自身が実際の住まいや住生活の改善や実践に結びつけにくい」、「子どもが体験的に学べる教材等の準備が難しい」等が挙げられる。そこで、家族構成を自分たちで考え、役割の背景に沿って、家族会議をし、「マイファミリーの家づくり」を考える手立てとして、全８班のうち、１～４班には幼児を、５～８班には高齢者を必ず家族に加える設定で活動を行っていた。住まいへの視野を広げ、知識を深めるために、①学校図書館と連携し、１８０冊の住まいに関する本を準備する。②住総研の研究員をゲストティーチャーとしてお話をいただく活動を取り入れる。③家づくりではコンピュータ支援設計ソフト「マイホームクラウド」を用いる等の手立てが図られていた。
参観した授業の題材は、学習指導要領「B　衣食住の生活」（６）ア、イを中核に据え、「A　家族・家庭生活」、「C　消費生活・環境」と連携を図った領域横断型の授業であった。展開では、班ごとにマイファミリーの家づくりについての発表が行われた。①「マイファミリーの住まい」のテーマ、②家族構成、③コンピュータ支援設計ソフトを用いて、住まい、住まい方の工夫の紹介、④それぞれの立場で考えたこと、質疑応答、コメント記入の順に展開し、その後、コメントを元に、再考するという流れであった。展開②については、教師が講じた手立てにより、自分の家族について言及することがないため、どの生徒も不安や心配なく学習へ取り組むことができていた。また家族構成と背景を生徒自身に考えさせ、その役割になって家族会議に臨むことにより「共生」の視点から家族関係について考える機会になっていた。展開③については班で話し合って決定した住居の間取りを Web 上で設計できる仕様であり、鳥瞰図にして出力したり、内覧したりできるため、生徒の興味関心が非常に高く、集中して班の発表を聞く生

徒の様子が見られた。展開④では、それぞれの立場において考えたことを発表することで、年代や性別、職業によって快適な間取りや住居に求めるもの、住みやすい住居への考え方が違うことに気付くことができていた。他の班からのコメントをもとに再考していく中で、自分たちの考えた住まい方は現実的ではなかったと反省する班もあった。しかし、中学生である現在使える情報と、大人になってから将来使える情報をわけて整理してみようという教師のアドバイスにより、生徒達の対話が更に深化していった。終末には、中学生（今の自分）から見たよりよい住まいについて考えることで、多様な視点から見たり、考えたりした情報を加味しながら、いったい何ができるか再考し考えが深化する様子がみられた。また、「現在は〇〇だが、大人になったらこうしたい」など、学習の課題を主体的に捉え、将来の生活を展望する発言もみられた。

③マイホームクラウドによる間取り図



③マイホームクラウドによる内覧（３Ｄ）

（協議会）

横浜国立大学教育学部付属横浜中学校教員、横浜市立中学校教員、岡山市立中学校教員、学芸大学大学院生と研究協議を行った。情報活用能力を育成するための手立て検討において、インターネットでの情報収集に偏ることはいかがなものかという意見があり、協議が進められた。インターネットでの情報収集を行うためには、得た情報が正しいものなのか、見方が偏った情報ではないか、インフルエンサーの情報を鵜呑みにしない、検索結果から似通った情報ばかりが提供されることに気付いているなどのネットリテラシーや、情報モラルの下地が必要となってくる。実生活に生かすためには、広告や、住居に関わる仕事に就いている人に話を聞くなど生活から情報を得た方が効果的ではないかという意見も挙がった。収集した情報をどのように活用したかが明確にわかるような手立てがあるとより研究主題に即した授業工夫になったのではないかという意見が出た。

（感想）

情報活用能力を育成する授業を行うにあたり、学校図書館との連携は必須であると感じた。学校司書の先生に情報が偏らないよう選書をしたり、教師が選書したものを見たりしていただくことで様々な情報を用意することができる。意識的に授業で本や資料から情報収集をすることを行わなければ、生徒達はインターネットでの情報のみで満足してしまい、多様な情報を比べたり、取捨選択したりするということは難しいと考えられる。インターネットでの情報収集は手軽であり、今後も必要となる技術であるが、技術科等でネットリテラシーの学びの基盤があってこその手段である。情報活用能力を育むためにも、情報収集の手段が偏ることのないように、授業に取り入れなければならないと考えさせられた。

学芸大学教授の講話を聴講し、小学校、中学校での学びを高等学校の学習に確実に繋げていくことの重要性について改めて知ることができた。小学校で習得した資質・能力があるからこそ中学校の内容が学習でき、中学校での学びがしっかりと身についているからこそ高等学校の学習に取り組める。そのために授業力の向上や、よりよい教材の選定・研究が教員に求められている。しかし、各学校１名の配属が多い家庭科は、校内で教科について学ぶことは難しい。そこで、現在の環境下で教員としての資質を向上するためには、今回のような先進校派遣を利用したり、公開研究へ積極的に参加したりすることの必要であると強く感じた。家庭科で扱う内容は、技術の進歩やライフスタイルの変化などによって常にアップグレードされているため、私達は教える立場として、アンテナを高く張り、新しいことを学ぶ姿勢を怠ってはならないと改めて実感することができた。今後もよりよい授業ができるよう積極的に研修していきたい。